

## 2010年の夏季高温による玄米外観品質低下とその対策

2010年の夏季は猛暑が9月上旬まで続いたため、水稻中生種「ヒノヒカリ」でも白未熟粒が多発し、県内ヒノヒカリの一等米比率は過去最低の17%となった。品種間差も大きく、昨年に奨励品種となった「きぬむすめ」は一等米比率56%と比較的品質が良好であった。栽培法では田植時期を遅らせる方法が、品質低下の抑制効果が高かった。

### 内容

2010年の稲作期間の気象は、5月の低温と夏季の高温に特徴があった。とくに夏季の高温は、平年なら気温が低下する8月下旬以降に気温が上昇し、9月上旬まで猛暑が続いた(図1)。

玄米品質低下の原因となる乳白、背白、基白などの白未熟粒は、出穂期以降20日間の日平均気温の平均が27℃以上になると多発しやすいことが知られており、本年は7月下旬から9月上旬までがこの気温にあたる。このため、今まで品質低下がみられなかった8月下旬に出穂する「ヒノヒカリ」でも、白未熟粒が多発し、一等米比率は17%と過去最低であった(図2)。

品種別の一等米比率は、「キヌヒカリ」が5%と極めて低く、「コシヒカリ」も44%と2001年以来の低品質であった。その中で2010年から奨励品種となった「きぬむすめ」は56%と、主要品種の中では最も品質が良好であった。

栽培法では、田植時期を遅らせることにより乳白及び基白粒の発生が抑制されて(図3)、検査等級が1~2等級向上した。「キヌヒカリ」では7月上旬、「ヒノヒカリ」では6月15日以降に稚苗を移植することで、2010年のような異常高温でも品質低下を抑制することが可能と考えられる。

### 今後の方針又は普及上の注意事項

「きぬむすめ」は栽培ごよみの栽培法を徹底し、良品質を維持するとともに、種子生産を増やし2011年300%、2012年1,000%と生産拡大を図る。

「キヌヒカリ」「ヒノヒカリ」は田植時期を遅らせることで品質は向上するが、収量の低下を伴うので注意する。

岩井 正志(農産園芸部)

(問い合わせ先 電話:0790-47-2410)

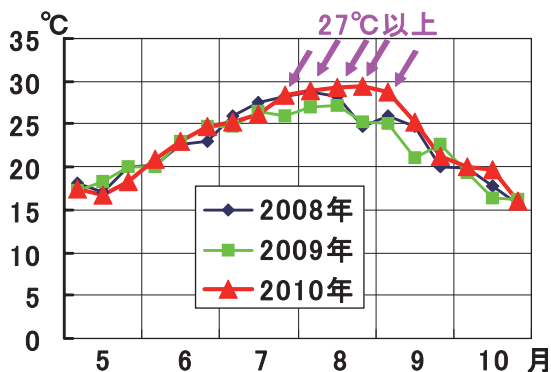


図1 平均気温の推移(福崎アメダス2008-2010)

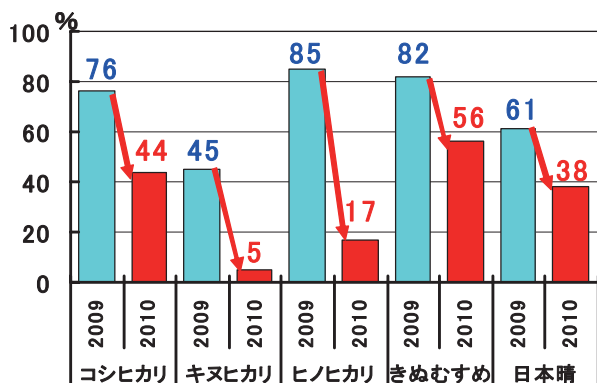


図2 品種別一等米比率の比較(2009、2010)

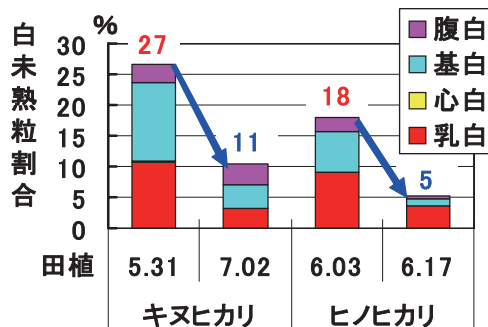


図3 晩植による品質改善効果